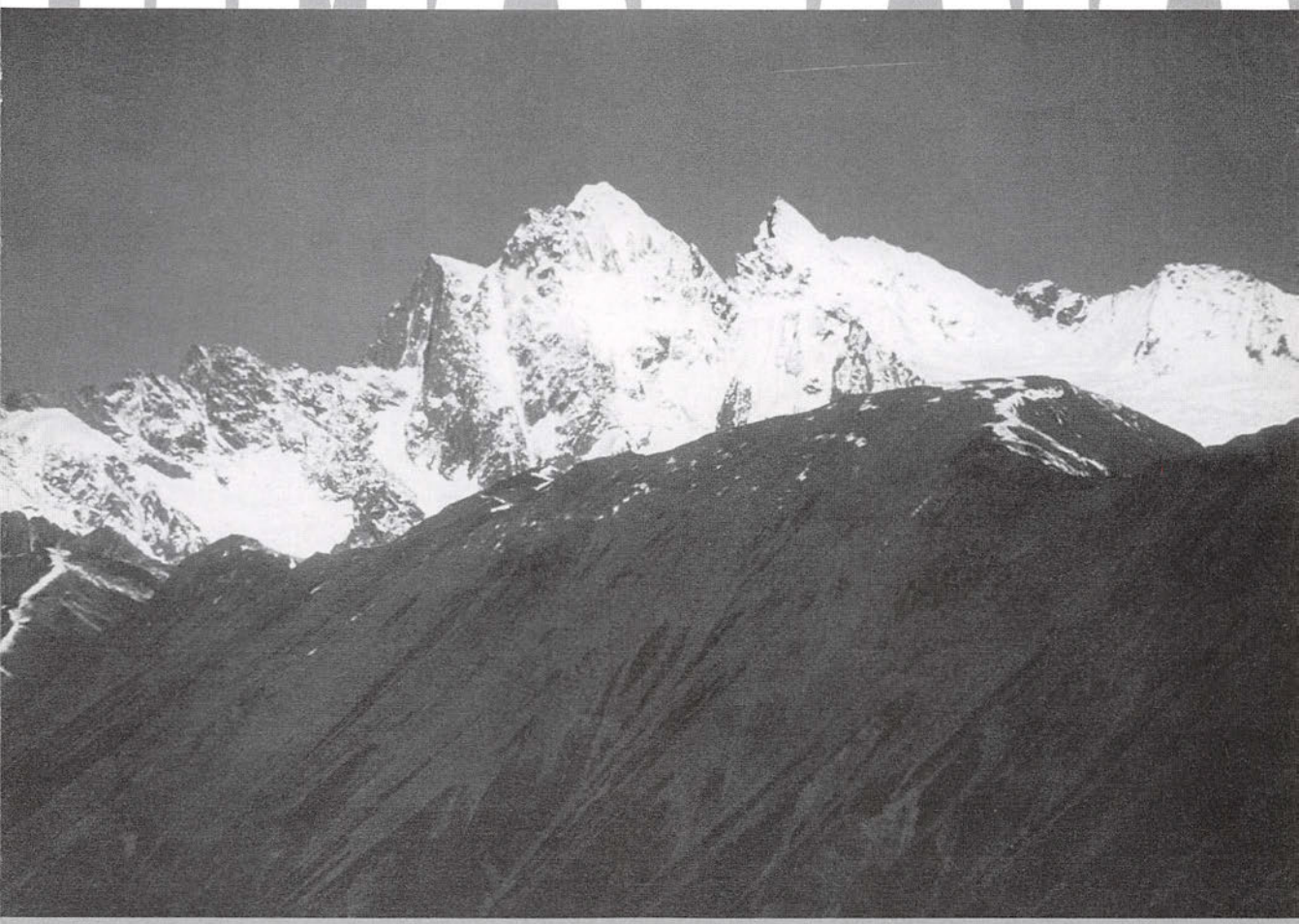
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成16年6月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.391



2004 JUN

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN　HAJ

平成16年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成16年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようにお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、添付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。) 5月13日までに必着するようお願いいたします。

記

1．日時　平成16年5月15日(土)午後1時～2時

2．場所　東京都豊島区東池袋4-7-7
かんぽヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分
地下鉄有楽町線東池袋（出口A2）から徒歩2分

3．議事
(1) 議案第1号　平成15年度事業報告について
(2) 議案第2号　平成15年度収支決算について
(3) 議案第3号　平成16年度事業計画について
(4) 議案第4号　平成16年度収支予算について

4．その他

ニンチン・カンサ トレッキング説明会

総会終了後、午後2時30分から同じ会場にて、今夏実施のトレッキングの説明会を開催します。参加を希望される方は、「総会出欠ハガキ」に「説明会希望」と明示して下さい。

会費納入のお願い

本会の会費は毎年3月末日までに前払いで納入をお願いしております。未納の方は1万円を郵便振替用紙にて下記へ納入下さい。

00100－6－48954　日本ヒマラヤ協会

表紙写真

2003年10月12日、快晴となる。朝マイナス4℃まで下がる。7時半に出発し10時半に待望の益秀拉(4,730m) に立つ。「オイラソー。神様、念願のイラワジ川源頭の峠に立つことができました。」峠には雪は殆どなく、草は枯れ茶色の無機質な世界である。谷の北北西に伯舒拉嶺の6,011mの無名の山塊が見えた。

(文と写真：中村　洋)

ヒマラヤ No. 391

1．国際山岳年の果たした役割　山森欣一
2．海外登山調査用紙統一についての経緯
4．パンゴン湖周辺の山々の登山一部解禁　沖　允人
9．カラコルム2004年登山隊リスト
10．東南チベット・イラワジ川源流から雲南へ(1)　中村　保
21．ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Ｂｏｏｋｓ〉
22．HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集
23．[連載]　日本ヒマラヤニスト名鑑（7）
24．事務局日誌

国際山岳年の果たした役割

日本ヒマラヤ協会理事長　山森　欣一

2002年は、国連が定めた「国際山岳年」に当たった。本来であるならば、国連関連のこのような記念行事は、関連する省庁が音頭をとって仕切られる筋合いのものであると思うが、どのような経緯か省庁の動きは緩慢であったらしい。

国連大学が日本にあるという事情から、関係する学者、登山者が連携して日本国内でも「国際山岳年」をアピールし行動しょうと協議し、「国際山岳年日本委員会」を設立した。

山岳に関係する者は多数あるが、官庁と産業を除けばその代表的なものは、「山岳を登山の場として利用する立場」の『登山者』と、「山岳を研究対象として利用する立場」の『学者』である。

日本ヒマラヤ協会（以下、ＨＡＪ）は、「ヒマラヤ地域」だけを活動の場と規定している全国組織であるが、その活動の90%は「登山」である。そのような立場でかねてから日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会と、「山岳四団体」として様々な問題に対して連携して活動してきた。その枠組みの中で、「国際山岳年」の活動を協議する場に、誘いを受け、最終的には、「日本委員会」を構成する一員となったのである。

だが、今回の国際山岳年において、ＨＡＪが独自に展開した行事はなかった。10年程前の1990年に、「山岳四団体」が協力して立ち上げた「日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（ＨＡＴ－Ｊ）」の場合は、その対象が「山岳」であり、対象地域を主に「ヒマラヤ」と見なし、啓蒙の対象者が「登山者」であることもあって、ＨＡＪは、「テイクイン、テイクアウト」の実践の先頭に立ち、啓蒙活動のほとんどをＨＡＪが引き受けていたと言っても過言でない。

だが、今回の国際山岳年では準備期間の少なさ、単年度の行事開催とあってＨＡＪではあらためて行事の開催は行わなかった。せいぜい、既に決定されている登山隊、記念行事の冠に「国際山岳年記念」と表示したに過ぎない。しかし、「日本委員会」の運営に当たっては一応の役割は果たしたつもりである。

さて、「日本委員会」の中で協議を重ねるうちに、委員の間には徐々にこの「国際山岳年」は、国連の規定とは別に、日本においては「単年度で終了」させずに、「山岳」が抱える諸問題に取り組むための「出発年」にしたい、との雰囲気が高まった。委員間には当然その意識には濃淡差は見られたものの、大方はそのような合意に傾斜していったようだ。

日本委員会から発信される「国際山岳年」に関する記事が、新聞や山岳雑誌に掲載されるようになったが、それが社会一般にどの程度浸透したのかは定かではない。

折しも、2002年夏ころから登山者と学者の一部が連携し、「登ることだけに山を利用し汚染し破壊し、山を研究することを怠ってきた」との反省から、「山岳文化学会」設立に動き2003年３月には設立に漕ぎつけた。その機関誌「山岳文化」第１号には、

『「山岳」を総合的に整理し、後世のため、将来の山岳研究のため、重要な歴史的財産として尊重し、保存する』ために設立したと書き記されている。

このような一例をとってみても、国際山岳年を切っ掛けに、「登山者と学者」が連携して、「日本委員会」を立ち上げ、様々な試みを実践しアピールしたことは、その声が全国津々浦々まで浸透しなかったにしても、「山岳」の未来を探り続けることの意義深さを知らしめる端緒の役割を果たし、この二者の合同は意味深いものであったと言えよう。

（注）本文は『国際山岳年日本委員会』が、活動終了として発行した報告書『我ら皆、山の民（We are all mountain peopl)』に、理事長の立場で同委員として参加した立場で執筆したものである。

海外登山調査用紙統一についての経緯

山岳４団体では、毎年夏に『三役懇談会』を開催しているが、2003年７月の同懇談会席上にて、本会から「海外登山調査用紙の統一」について提案。同年11月に改めて他３団体に実務者会議の開催を呼び掛け、同時に「日本ヒンズークシュ・カラコルム会議」にも声を掛け、各団体からの賛同を得た。12月～３月に４回の実務者会議を開催し、協議検討を重ねた結果下記のとおり『合意』に達し、それぞれの団体での機関決定を経て、３月31日、岸記念体育館会議室において記者発表を行った。

今後はこの５団体の合意にもとずいて『高峰登山』についての、計画・報告が一カ所（当初は２カ所）に集約されることになる。関係各位のご協力を賜りたい。　　（文責：理事長　山森欣一）

＃実務者会議［日本山岳協会＝尾形好雄常務理事、日本勤労者山岳連盟＝香取純海外委員長、日本山岳会＝大蔵喜福常務理事、日本ヒンズークシュ・カラコルム会議＝亀井正、ＨＡＪ＝山森欣一理事長］

＃３月31日記者発表［日山協＝田中文男会長、八木原圀明専務理事、尾形常務理事、ＨＡＪ＝山森理事長］

高峰登山調査用紙統一の合意事項

［２００４年３月２７日］

１．対 象 山 岳：

アジア地区は標高５,０００m以上

その他地区は標高６,０００m以上

２．統一調査用紙：

用紙１　高峰登山計画書（別紙用紙Ａ４サイズ１枚、１ページ）

＊別途作成した計画書がある場合は、それを提出してください。

＊ＦＡＸ送信でも構いません。

用紙２　高峰登山報告書（別紙用紙Ａ４サイズ２枚、４ページ）

＊報告書につきましては、時間的なこともありますので本用紙を提出して下さい。

３．実 施 時 期：

２００４年（平成１６年）４月１日

４．登山隊、登山者への統一調査用紙の送付実務と提出先：

＊一般登山隊及び一般登山者

（社）日本山岳協会

〒150-0805　東京都渋谷区神南１－１－１　岸記念体育館内

ＴＥＬ　０３－３４８１－２３９６　　ＦＡＸ　０３－３４８１－２３９５

＊但し、日本勤労者山岳連盟所属登山隊及び登山者は、同連盟の共済制度と連動するため同連盟とする。

日本勤労者山岳連盟

〒162-0805　東京都新宿区矢来町１０８　第５英晃ビル

ＴＥＬ　０３－３２６０－６３３１　　ＦＡＸ　０３－３２３５－４３２４

５．提 出 費 用：

登山隊及び登山者負担でお願いします。

６．高峰登山計画書及び報告書の利用：

登山団体、登山者、報道機関、一般を問わず誰もが別途定める費用を納入して利用することができます。

高峰登山調査用紙の統一について

私共、全国的な規模を有する登山４団体［(社) 日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、(社) 日本山岳会、日本ヒマラヤ協会］は、国の内外からヒマラヤをはじめとする高峰登山の情報を求められておりますが、これまでは各団体が独自にこれに対応して参りました。

また、その対応のためとそれぞれの団体が主催する研究会等の資料として、各登山隊に対して登山の概要を報告して戴く「登山調査用紙」を、それぞれの団体独自の内容を網羅した様式で提出をお願いしておりました。

このことは一つの登山隊に３～４団体から少しづつ内容の異なる「登山調査用紙」提出の依頼が届くことになり、結果的に提出が滞るという弊害が見受けられ、なによりも登山隊にとって複数の調査用紙を作成することは多大なる不利益でもありました。

２１世紀に入り「高峰登山」の世界は一変しております。その第一の要因は、ヒマラヤ諸国に代表されるように「受入れ国側」の規制緩和が進んだことにあります。ほとんどの国が「推薦状」制度を廃止したため、我が国からヒマラヤ諸国の山々へ入る登山隊を、私共登山４団体が自動的に把握し、その結果を収集・整理することが困難な状況となって参りました。

一方、私共が実践してきたこの素晴らしい「高峰登山」は、文化活動として広く一般社会と密接なかかわりを持ちながら進展してきました。登山は決して一般社会から遊離した存在ではありません。

この点からも登山者の行為の結果（記録）を収集・整理し、一般社会に情報を提供しつつ次代へと継承していくことは、「登山文化」の担い手である登山４団体の責務であります。

この度、私共登山４団体と、全国的な集団であります「日本ヒンズークシュ・カラコルム会議」は、登山者の不利益を解消し、記録の収集を積極的に行い整理し、これを次代に引き継ぐべく、登山隊・登山者から提供して戴く「高峰登山調査用紙」の様式を統一し、且つ、その提出先をも統一することで合意致しました。

具体的に内容につきましては別紙のとおりであります。私共の趣旨をご理解戴きまして、登山者の皆様をはじめ関係者各位のご協力とご支援を宜しくお願い申し上げます。

２００４年３月２７日

社団法人　日本山岳協会
　会　長　　田　中　文　男
日本勤労者山岳連盟
　会　長　　守　屋　益　男
社団法人　日本山岳会
　会　長　　平　山　善　吉
日本ヒマラヤ協会
　理事長　　山　森　欣　一
日本ヒンズークシュ・カラコルム会議
　事務局　　亀　井　　正

（注）高峰登山計画書＆報告書の登山隊区分の例示

［組織内公募登山隊＝日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会など全国的規模で構成されている団体が各組織内で隊員を募集した登山隊］［一般公募登山隊＝社会人山岳会、職域山岳会、大学山岳部・ＯＢ会などが組織した登山隊］［国内・外国商業登山隊＝営利を目的として国内は日本人が、外国は外国人が一般から隊員を募集した登山隊］［その他＝個人的な登山］

パンゴン湖周辺の山々の登山一部解禁

沖　允人

パンゴン湖周辺のこと

名古屋の中京山岳会が2004年8月から9月にかけてパンゴン湖西のパンゴン山脈のカックステット(Kangju Kangri(Kakstet), 6,724m)とハロン(Harong, 6,362m)を、インド人との合同隊、できれば日本人だけでの隊(隊長・沖允人)としての登山許可の申請をしていた。IMFと粘り強く交渉した結果、このほど日本人だけの隊としての許可が内定した。隊員候補は女性2名を含む7名である。カックステットは「ヒマラヤ」本年3月号の「新ヒマラヤ会議」のサティヤブラタ・ダム氏の報告にあったパンゴン山脈東南部の山で、ハロンは東北部の山である。

周知のように、実際にインドの国境地帯の制限地域で登山を開始できるまでには、IMFだけでなく、国防省、内務省、外務省、国境警備隊、地元警察などの許可が必要であり、また、インド大使館を経由して登山用のビザの取得が必須なので、予断は許せない。しかし、門は開かれたと考えている。

以下に述べるように、パンゴン湖周辺には多くの6,000m峰があり、このうちパンゴン山脈東南部の数座がインド隊によって近年になって初登頂されたが、まだ多くの未踏峰がある。私たちの登山隊が入域できれば、外国人としては歴史始まって以来であり、日本人としてももちろん初めてである。

パンゴン山脈はレーの東北東約80kmにあり、車で最低2泊3日かかる。登山に適する時期はレーからのアプローチの途中にあるチャン・ラ(Chang La, 5,291m)の峠が越せる6月末から10月末までである。

パンゴン湖畔を日本人トレッカーとして初めて訪れたのは、日本ヒマラヤ協会の松舘正義と沖允人で、1994年の夏のことであった。あれから10年がたち、あのときの夢が実現しようとしている。

1994年以降、一般旅行者は特別入域許可を取得すれば、ガイド付きでタンツェのすぐ先のパンゴン湖畔北端のごく一部を短時間訪れることはできる。しかし、湖の近くで宿泊することは禁止されている。最近では、2003年夏に愛知県春日井市の増田秀穂夫妻がパンゴン湖を訪れている。

パンゴン湖周辺へのアプローチ

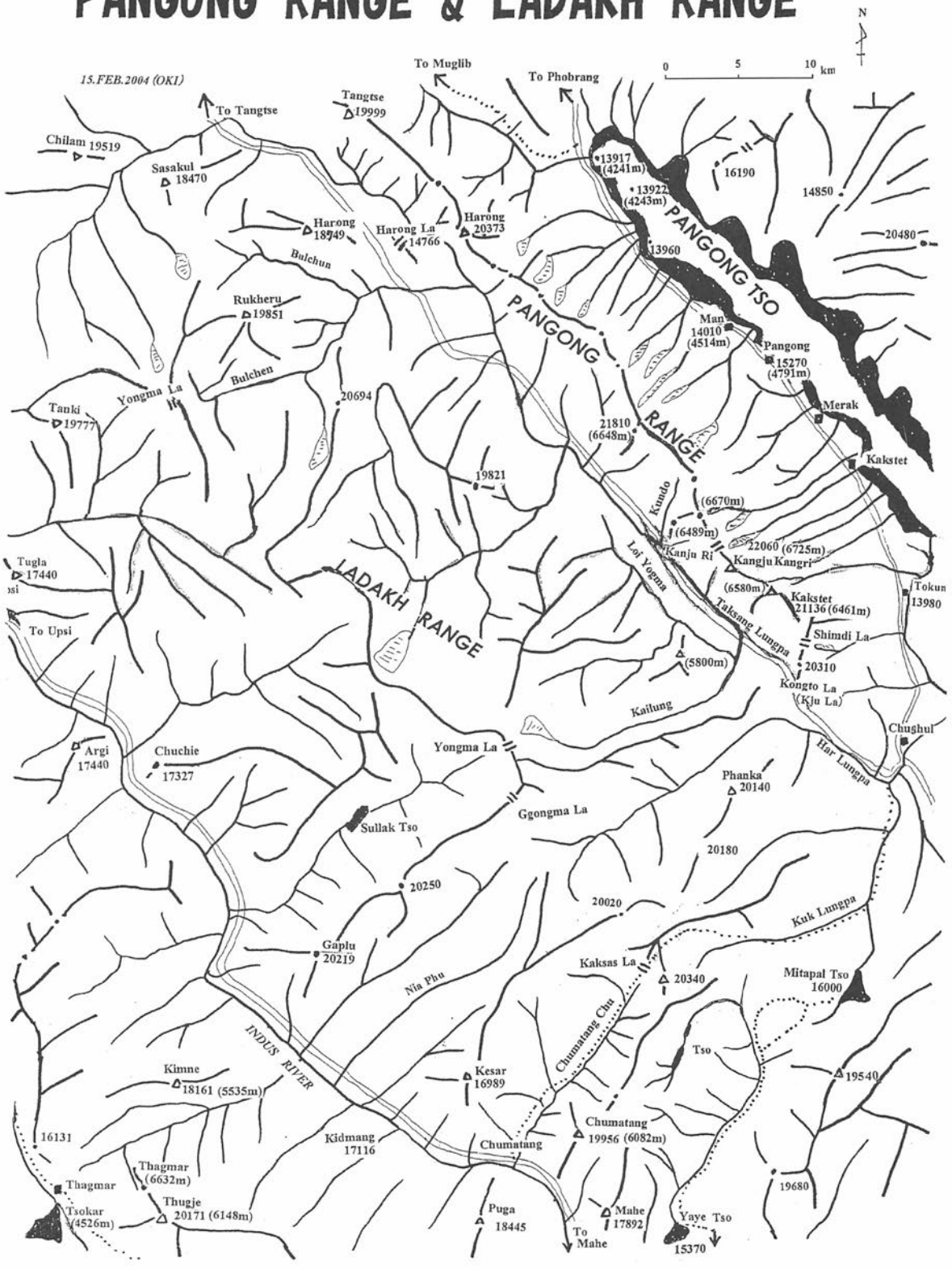
ラダックの主都レーからチャン・ラの峠を越えて簡易舗装された軍用道路が東にのびている。その支線がパンゴン湖畔にのび、ここまで一般旅行者は行くことができる。道路はさらに延びて、スパンミク(Spangmik)から途中で湖の名前と同じ小ピーク、パンゴン・ツォ(Pangong Tso, 4,791m)の北側をまいてカクステット(Kakstet)、トクン(Tokung)などの軍事基地に通じている。

なお、文中および別表の5桁の数字はAMS地形図によるフィートで示した標高でそれに0.3048を乗じてメートルに換算したものを示す。ロシア製の地図による標高も併記したが地図や登山隊の報告による標高には若干の差異がある。

一方、中国側からも軍用道路は建設され、カイラス・カシュガル間の道路の途中にある日土(ルトク)の中国軍駐屯地から西に伸びてパンゴン湖畔に達している。2000年に足利工業大学チベット学術調査隊(沖允人隊長)が中国側からパンゴン湖への接近を計画したが許可取得ができなかった。

パンゴン湖周辺はインド・中国両国共に重要な国境地帯であり、軍用道路はもちろん軍事基地、ヘリポートなど多くの軍用施設が建設されている。これらの維持には莫大な費用がかかり、両国とも頭痛の種になっているという。ちなみに兵隊1人の維持に年間トラック2台分の物資が必要だといわれている。

PANGONG RANGE & LADAKH RANGE



パンゴン湖周辺の山々

山　名 ○印既登峰	標高 (m)	おおよその 位　置	緯度 (N)	経度 (E)	標高 (m) RUSIA	標高 (m) その他	標高 (ft) AmS	備考（その他の標高(s)は 三省堂山名辞典） （その他の標高(1995)はインド隊）
Harong山域								
Tangtse	6,069	北西部	34° 00'	78° 15'	6,065		19,999	Harongの北西約 5 km
Unnamed P.	5,244	北西部	33° 57'	78° 19'	5,244			Harongの北西約 5 km
Harong	6,362	北西部	33° 55'	78° 20'	6,309	6,209(s)	20,873	Harong La(4,507m)を挟んで同名の山
Harong	5,715	北西部	33° 50'	78° 14'	5,815	5,715(s)	18,749	Harong Laを挟んで同名の山
Unnamed P.	6,442	北部	33° 09'	77° 59'	6,442			Spmpanaの北 1 km、Pangon山脈最北の6,000m峰
Unnamed P.	5,291	北西部	33° 59'	78° 23'	5,291			Imur Camp地の北 2 km
Unnamed P.	5,327	北西部	33° 58'	78° 21'	5,327			Harongの北 6 km
Unnamed P.	5,414	北西部	33° 56'	78° 23'	5,414			Imur Camp地の南 2 km
Unnamed P.	5,774	北西部	33° 49'	78° 23'	5,774			6,565m峰の西12km
Unnamed P.	6,309	北西部	33° 52'	78° 23'	6,309			HarongからKakstetの主稜線上UP6,585mとの間
Unnamed P.	6,341	北西部	33° 51'	78° 26'	6,341			HarongからKakstetの主稜線上UP6,585mとの間
Kakstet山域								
○Kakstet (Kangri)	6,363	南東部	33° 42'	78° 40'	6,363	6,461 (1995) 6,442(s)		1973, ITBP Exploring. 1983, Army Exploring. 1995, Pre-Everest, HJ. Vol.58
○Unnamed P.	6,580	南東部	33° 41'	78° 40'		6,580 (1995)		Kakstetの東 2 km 1983, Army, Exploloring., 1995, Pre-Everest, HJ. Vol.58
Kangju Kangri山域								
○Kangju Kangri (Local Name:Thinguru)	6,724	南東部	33° 44'	78° 31'	6,725	6,725 (1995)	22,060	南面から登頂 1983, Army, Exploloring., 1987, ITBP, HJ. Vol.45, 1995, Pre-Everest, HJ.Vol.58
○Unnamed P.	6,134	南東部	33° 42'	78° 35'	6,134			Kakstet南のShikti Lungpaの南岸にあり、北西面から登頂 1995, Pre-Everest, HJ.Vol.58
Unnamed P.	6,585	南東部	33° 48'	78° 29'	6,585			Kangju Kangriの北西 8 km
Unnamed P.	6,486	南東部	33° 45'	78° 30'	6,486			Kangju Kangriの北西 5 km
merik	6,470	南東部	33° 47'	78° 29'	6,470			Kangju Kangriの北西 8 km
Unnamed P.	6,190	南東部	33° 49'	78° 35'	6,165		20,310	Kakstetの南約6km
Unnamed P.	5,508	南東部	33° 33'	78° 42'	5,388		18,070	Kakstetの東南東約23km
Unnamed P.	5,684	南東部	33° 33'	78° 42'	5,650		18,684	Kakstetの東南東約22km
Unnamed P.	5,122	南東部	33° 46'	78° 26'	5,122			Kangju Kangriの北西 7 km
Pangong	6,127	Pangong 湖東岸東部	33° 51'	78° 42'	6,127			Pangong湖北部の東海岸の東 5 km
Pansong Tso	4,791	Pangong 湖西岸中部	33° 51'	78° 33'	4,854		15,720	Pangong湖北部 1 kmの西海岸
パンゴン湖の北東部と中印国境との間　　Pangong湖をP湖と略記								
Unnamed P.	6,715	P湖の北東部と中印国境間	33° 49'	78° 47'	6,263		20,030	Kakstetの北東約24km
Unnamed P.	5,438	P湖の北東部と中印国境間	33° 47'	78° 45'	5,488		17,990	Kakstetの北東約21km
Unnamed P.	5,688	P湖の北東部と中印国境間	33° 46'	78° 48'	5,682		18,660	Kakstetの東北東約22km
Unnamed P.	5,072	P湖の北東部と中印国境間	33° 49'	78° 36'	5,073		16,640	Kakstetの北東約18km

Unnamed P.	6,151	P湖の北東部と中印国境間	33° 52'	78° 40'	6,181		20,180	Kakstetの北北東約25km
Unnamed P.	6,081	P湖の北東部と中印国境間	33° 57'	78° 42'	6,081			Kakstetの北東約27km
Unnamed P.	6,009	P湖の北東部と中印国境間	33° 58'	78° 44'	6,009			Pangong湖の東約10kmの国境線上
Unnamed P.	6,096	P湖の北東部と中印国境間	33° 57'	78° 46'	6,096			Pangong湖の東約10kmの国境線上
Unnamed P.	6,278	P湖の北東部と中印国境間	33° 51'	78° 50'	6,278			Pangong湖の東約10kmの国境線上
Unnamed P.	6,094	P湖の北東部と中印国境間	33° 48'	78° 52'	6,094			Pangong湖の東約10kmの国境線上
Unnamed P.	6,021	P湖の北東部と中印国境間	33° 47'	78° 53'	6,021			Pangong湖の東約10kmの国境線上
スパングール湖の南部と中印国境との間　　Spanggur湖をS湖と略記								
Unnamed P.	5,209	S湖の南部と中印国境間	33° 32'	78° 42'	5,209		17,090	Spanggur湖中心から西約 2 km
Unnamed P.	5,044	S湖の南部と中印国境間	33° 28'	78° 52'	5,044		16,650	Spanggur湖中心から南約12km
Unnamed P.	5,578	S湖の南部と中印国境間	33° 29'	78° 48'	5,578			Spanggur湖中心から西南約 3 km
Rezani	5,291	S湖の南部と中印国境間	33° 25'	78° 51'	5,291			Rezaniのツインピーク? Bapiの西 3 km
Rezani	5,361	S湖の南部と中印国境間	33° 25'	78° 51'	5,361			Rezaniのツインピーク? Bapiの西 3 km
Bapi (Banu)	6,215	S湖の南部と中印国境間	33° 25'	78° 55'	6,215	6,300(s)		Spanggur湖中心から南約13km国境線上
Unnamed P.	6,171	S湖の南部と中印国境間	33° 28'	78° 58'	6,171			Bapiの北の国境線上
Unnamed P.	5,692	S湖の南部と中印国境間	33° 27'	78° 59'	5,692			Bapiの北の国境線上
Unnamed P.	6,209	S湖の南部と中印国境間	33° 24'	78° 55'	6,209			Bapiの南の国境稜線上
Unnamed P.	6,083	S湖の南部と中印国境間	33° 27'	78° 55'	6,083			Bapiの北 2 km
Sajum	6,102	S湖の南部と中印国境間	33° 20'	78° 53'		6,101(s)	20,018	Spanggur湖中心から南約22km国境線上
Unnamed P.	6,045	S湖の南部と中印国境間	33° 35'	78° 53'	6,045			Spanggur湖の北 3 km
Unnamed P.	5,650	S湖の南部と中印国境間	33° 39'	78° 46'	5,650			Spanggur湖の北西 3 km
Unnamed P.	5,510	S湖の南部と中印国境間	33° 38'	78° 52'	5,510			Spanggur湖の北 5 km国境線上
Unnamed P.	5,799	S湖の南部と中印国境間	33° 37'	78° 54'	5,799			Spanggur湖の北 5 km国境線上
Unnamed P.	5,683	S湖の南部と中印国境間	33° 36'	78° 59'	5,683			Spanggur湖の北 5 km国境線上
Unnamed P.	4,931	S湖の南部と中印国境間	33° 32'	78° 47'	4,931			Spanggur湖の南 1 km
Unnamed P.	4,884	S湖の南部	33° 38'	78° 41'	4,884			Chushulの東 3 km

中印関係の雪解け

軍用道路はパンゴン湖の近くでロイ・ヨンマ(Loi Yongma)川に沿って南東にチュシュール(Chushul, 4337m)村を経て、さらに南下し、ツァカ・ラ(Tsaka La, 4724m)を越えてアサレ(Asale)でインダス川の合流点まで達し、マヘ (Mahe, 4,267m)を経るインダス川沿いの道に合している。マヘにはチェックポストがあり、一般旅行者はここから南と北には入れない。ただし、マヘにかかる鉄橋を渡り、南東へ向かうことはでき、かなりラフな道がツォモリリー湖畔(Tsomoriri, 4,300 m)のカルゾックの村まで伸びている。また、ラ

フな道路がスムドウ(Sumdo, 4,407m)からポロコンガ・ラの峠(Polokgongka La, 4,940m)を越えてトゥジェ(Thugje, 4,640m)の集落に至り、さらに湖の近くを通ってレー・マナリ道路のタグラング・ラの峠(Taglang La, 5,359m)の南の標高約4,000mのモア高原(More Plane)に達する。無雪期で道路の条件が良ければ、このコースは四輪駆動車なら走行可能である。

朝日新聞の平成16年1月22日の報道によると、チュシュール村で平成15年8月15日のインド独立記念日の式典が行われ、地元住民とともに中国兵約20人が招待されたところで、インド国旗の掲揚後、民族音楽に合わせて両軍兵士が踊ったという。同年11月18日にはインド国境を守っていた第4軍団のシン軍団長や将校6人が、インド軍代表団として初めてチベットのラサを訪問した。これは中印関係の雪解けを思わせるニュースである。

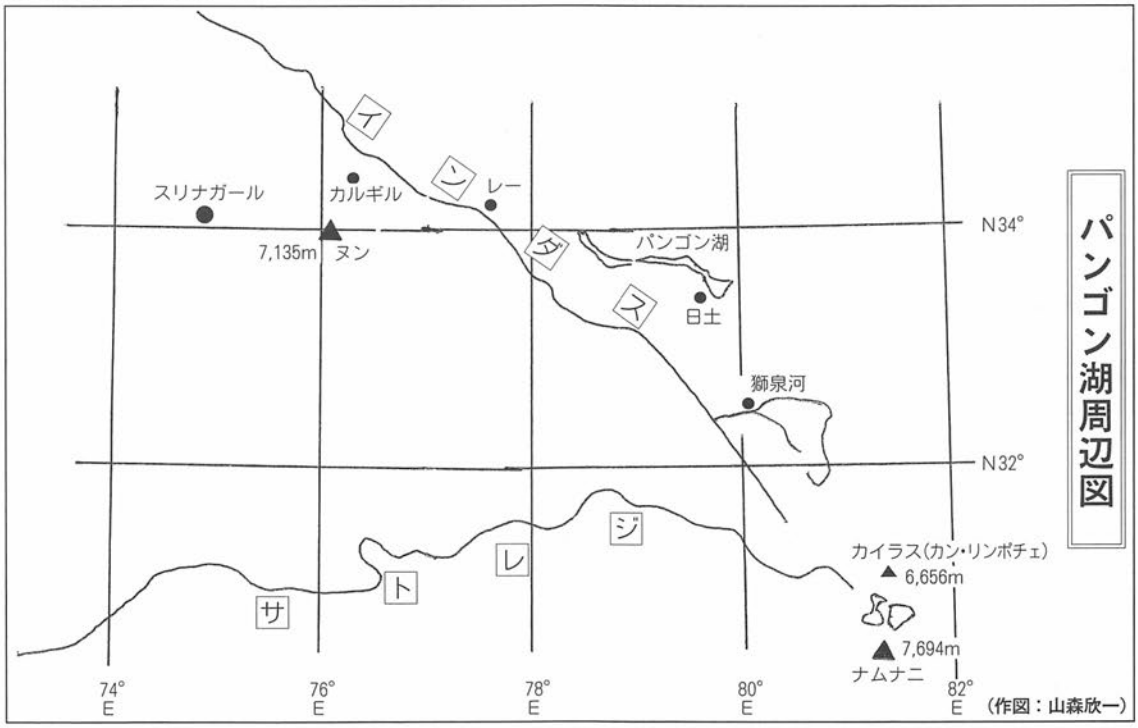
パンゴン山脈と周辺の山々

パンゴン山脈はラダック山脈に平行して、ショーク川(Syok River)にルザム・ルンパ(Luzam Lungpa)という支流が合流する地点からパンゴン湖の南東部に延びスパングール(Spanggur Tso)湖の南西部あたりまで、ほぼ、東経78度10分・北緯34度10分から東経78度50分・北緯33度25分までのびる約120kmの山脈である。地図で判断するとパンゴン湖側の北東側斜面が傾斜は緩そうであり、南西側は急峻である。パンゴン湖は標高4,242mで、Lの字を横に伸ばした形をしており、東西二つの湖からなり、二つの湖は真ん中あたりを約2kmの川で繋がっており、ここにインドと中国の未確定国境線が北から南に走っている。湖の長さは約135km(端から端までは約270km)ある。水深は最も深いところで304mもある。内陸性の塩湖で、冬はマイナス20度以下となり、湖は完全に凍結する。

パンゴン湖の南にはパンゴン湖とおなじような形で10分の1くらいの大きさのスパングール湖があり、長さは約20kmある。標高は4,328mである。

AMSの25万分の1地形図、第2版「NI-44-9」「Pangong Tso」とロシヤの20万分の1地形図「KIARI」「09-44-19」によると別表のような標高のピークがある。これらの多くは未踏の無名峰である。

本年夏に、どこまで入域でき、登山できるかは未確定の部分も多いが、探検的登山のフィールドとしてパンゴン湖とその周辺は興味ある地域である。



カラコルム2004年登山隊リスト（2004年３月６日申請までのもの）

隊No.	山名 国名	隊長名 ／ 住 所	入国日	人数
	K－2			
1	イタリア	Mr. Alessandro Cannavo	6月１日	7
2	日本（北海道）	松本　政英 札幌市厚別区厚別４条2-5-3-202	6月４日	14
3	イタリア	Mr. Agostino Da Polenza	5月20日	25
4	オーストリア	Mr. Walter Zorer Pfarrer-Leuprecht-WEG 1/20 6405 Obaerhofen Austria	5月31日	7
5	スイス／イタリア	Mr. Kari Kobler	6月９日	20
6	オーストリア	Mr. Alfred Schreilechner	6月１日	15
7	スペイン	Mr. Emilio Serrano	5月26日	9
8	スペイン	Mr. Juan Oiarzbal	5月20日	7
	ガッシャーブルムⅠ			
9	スロベニア	Mr. Stojan Burnik PHD	6月27日	9
10	スペイン	Mr. Jose Carlos Pauner Gotor	5月22日	7
11	オーストラリア	Maj. Zac Zaharias	6月10日	6
	ブロードピーク			
12	オーストリア	Mr. Walter Zorer Pfarrer-Leuprecht-WEG 1/20 6405 Obaerhofen Austria	5月31日	7
13	オーストリア	Mr. Alfred Schreilechner	6月１日	15
14	イタリア	Mr. Casarotto Gianpaolo	6月14日	13
15	スペイン	Mr. Emilio Serrano	5月26日	9
16	カナダ	Mr. Roland Hunter	6月15日	15
17	スイス	Mr. Richard Bolt	6月２日	12
18	ニュージーランド	Mr. James Stuart Mcguinness	6月15日	19
	ガッシャーブルムⅡ			
19	オーストリア	Mr. Wolfgang Fuchs	6月４日	14
20	オーストリア	Mr. Gotthard Neumayr	5月23日	7
21	スペイン	Mr. Joan Casoliva Armengou	6月９日	11
22	スペイン	Mr. Carlos Martinez Angulo	6月10日	10
23	イタリア	Mr. Giovannini Diego	6月14日	16
24	アメリカ	Mr. Stuart Renebsnyder	6月１日	14
25	スロベニア	Mr. Stojan Burnik PHD	6月27日	9
26	スペイン	Mr. Jose Carlos Pauner Gotor	5月22日	7
27	シンガポール	Mr. Lindley Zerbe	5月31日	9
28	オーストラリア	Maj. Zac Zaharias	6月10日	6
29	スペイン	Mr. Manuel Pedro Navarro Andreu	6月11日	15
	ナンガパルバット			
30	コロンビア	Dr. Volker Stallbohm	6月７日	5
21	オーストリア	Mr. Josef Delmarco	6月12日	10
32	スロベニア／アメリカ	Mr. Steven House	6月15日	6
	カンジュトサール			
33	アメリカ／ロシア	Mr. Lev Loff	7月11日	6
	クンヤンチッシ			
34	ポーランド	Mr. Grzegorz Skorek	7月22日	3
	K－6			
35	スロベニア	Mr. Matej Mejovsek	6月19日	7
	K－6西峰			
36	スロベニア／アメリカ	Mr. Steven House	6月15日	6
	スパンティーク			
37	スペイン	Mr. Isidoro Sanchfez	5月26日	4
38	日本	平出　和也	5月31日	2
	K－7			
39	スロベニア	Mr. Steven House	6月15日	6
	プーパラッシュⅠ			
40	日本（豊橋）	中山　秀樹	7月19日	4

東南チベット・イラワジ川源流から雲南へ(1)

－偉大な探検家F. M. ベイリーの足跡をたどる－

2003年10月

中村　保

1999年は苦い経験をした年だった。察隅からイラワジ川源流を目指したが、許可の問題で挫折、カンリガルポ東部山群の偵察だけに終わってしまった。運の悪いことに林芝県の八一鎮において不法入域の咎で公安局に捕まってしまった。後始末に１年かかり、法外な出費を余儀なくされ思わぬ苦労をした。その後、2000年は四川省、青海省へ、2001－2002年は念青唐古拉山東部に集中した。そして、2003年秋、４年間温めてきた夢をようやく孵化させることができた。

今度も横断山脈研究会の永井剛さんがパートナーである。一橋大学山岳部先輩の横山さんも参加したが、キャラバン出発点の桑久から車で引き返した。雲南・徳欽のチベット族ガイド、陳さんに旅の手配、同行をお願いした。インド・ミャンマー北部に近い東南チベットの察隅から入る横断ルートは東チベットの中では最も入域の難しい未開放地区であるが、西蔵軍区の許可がとれ長年の夢が実現した。この地域を踏破した外国人は1911年のベイリー以降、独龍江（イラワジ川源流）下降を狙った1993年のアメリカ人冒険野郎とフランス人のカメラマン、通訳だけである。無許可で入った彼等は日東の解放軍駐屯所で捕まり10日間の拘束のあと追放されている。以下、旅の目的と日程の要約をしたあとハイライトを紹介する。（地図、ルート図、写真を添付）

踏査行の目的・成果

1．イラワジ川（中国名：独龍江）源流の探査と水源の山の確認
2．1911年のキャプテン・ベイリーの足跡の検証と今日の比較
3．横断山脈の核心部「深い浸食の国」－五つの大河の完全横断
4．陸の孤島、日東とツァワロン・メンコンの今日の姿を取材―（百歳の老人をインタビュー）
5．60年振りに賑わう羊年の梅里雪山の巡礼と共に旅をする
6．バショイラ嶺の秘峰「木孔雪山山塊6,005m」を探る

以上の成果を上げることができた。この他に、ミャンマー最北部との国境にアクセスする計画も立てたが、解放軍の駐屯所が展開し中国人でも許可が必要であり、外国人は厳禁と言われたので断念した。

日程と同行者

10月１日：東京－上海（空）、２日：上海－昆明1,890m（空）
３日：曇・小雨、昆明－香格里拉3,220m（シャングリラ）（空）－徳欽3,230m(車)
４日：小雨、徳欽にて準備
５日：曇、徳欽－塩井温泉2,390m（車）、６日：曇、塩井温泉－左貢3,720m(車)
７日：快晴、左貢－八宿3,300m（車）
８日：晴後曇、八宿－然烏3,900m－徳母拉4,802m－察隅県竹瓦根－桑久（車）
９日：桑久にて馬のキャラバン手配、小学校に泊まる
（10月10日－26日、17日間の馬のキャラバン）
10月10日：雨、桑久3,090m－明期・放牧小屋3,635m、馬11頭・馬方３人　桑久－日東

11日：曇後晴、明期－益秀拉手前の放牧小屋（チョンチュン）4,170m
12日：快晴、放牧小屋－益秀拉 4,730m－イラワジ川源頭－キャンプ 4,040m
13日：快晴、キャンプ－イラワジ川源流沿い－江空キャンプ 3,995m
14日：晴、キャンプ－昌拉 4,460m－扎龍キャンプ 4,020m
15日：晴、キャンプ－白安・放牧小屋 3,780m
16日：晴、白安放牧小屋－日東 3,560m・チベット族の家、馬を替える
17日：快晴、日東－斎馬拉 4,710m－キャンプ 4,020m、馬10頭・馬方２人　日東－門空（メンコン）
18日：晴後曇、キャンプ－諾拉 4,269m－キャンプ 3,120m
19日：曇後晴、キャンプ－門空 2,200m・チベット族の家
20日：晴、門空にて取材、百歳老人をインタビュー、馬を替える
21日：晴、門空－扎那 2,100m－龍普 2,490m・チベット族の家
　　ラバ７頭・馬方２人　門空（メンコン）－塩井（エンジン）
22日：晴後曇、龍普－トンディ・ラ 3,352m－格布 2,460m・チベット族の家
23日：曇、格布－瓦浦 2,730m－ラドウン 2,880m・チベット族の家
24日：晴後曇、ラドウン－トン・ラ 3,270m－碧土 3,170m・キャンプ
25日：曇後雪、碧土－ベダ・ラ 4,540m－沖曲 2,880m・チベット族の家
26日：曇・小雨、沖曲－ラゴン根巴 3,480m－甲達 2,440m－塩井 2,700m
　　塩井で馬のキャラバン完了、あとは車で塩井温泉へ
10月27日：曇、塩井温泉－徳欽（車）
28日：曇、徳欽－シャングリラ（車）－昆明（空）

中国側の同行者を紹介しておこう。まずは『深い浸食の国』（山と渓谷社　2000）に登場するガイドの陳さんこと陳小宏（チベット名：格茸）31歳。今では梅里雪山の麓の徳欽ではゴルジュの国のトレッキングに関し最も経験が深いガイドである。梅里雪山巡礼（1996）、玉曲峡谷（1998）、カンリガルポ（1999）の旅で私に同行した。今回のイラワジ川源流行も含め、すべての旅が彼にとって知らない世界だった。その意味で陳さんのキャリアは私に負うところ大であり、彼自身もそう認識している。今では独立してツアー会社を経営している。飄々としているが誠実で冷静沈着、信頼に足りる。ユーモアもありたいへん好感がもてる。安心して一緒にいられるガイドである。苦労人でもあるらしく、貧しい人たちにたいする思い遣りが強い。桑久小学校の貧しい生徒の家にでかけ、子供を察隅（吉公）の中学校に寄宿させている母親に800元を学費（年460元）に使ってくれと言って与えたという。いい話である。チベット族の相互扶助の習慣もあろうが、陳さんの優しさには心を洗われた。陳さんは今や私にとってはガイドというよりよきパートナーである。

日本語通訳はハルビン出身24歳の漢族、喬国恩さん、厳しい長旅をよく頑張ってくれた。コックはチベット族女性の阿松さん。手際よく料理をしてくれる。体力は抜群で酒も強い。自家製のチンコー酒（大麦のチベット焼酎）を持参し毎晩飲んでいた。親切で心根の細やかな女性である。離婚をして２人の息子を高校に通わせている。いい仲間が旅を楽しくしてくれた。

イラワジ川の水源はいずこ

イラワジ川はアジアの大河の一つである。中国西部、東南チベットを水源とする恩梅開江（Nmai　Kha）とミャンマー最北部を水源とする邁立開江（Mali　Kha）がミャンマーのミチーナ北方45kmのところで合流してイラワジ川となる。全長2,150km、アンダマン海に注ぐ。世界の50大河中、河の長さ、流域面積、河口での年平均流量を総合的に評価すれば世界代12位、年平均地表水流量では第10位にランクする大河である。

恩梅開江は中国領内に入ると独龍江と呼名が変

わる。独龍江の河長は178.6km（チベット自治区内：86.9km、雲南省内：91.7km）である。川の東側は4,000－5,000mのバショイラ嶺で怒江（サルウィン川）との分水嶺を形成し、西側はミャンマーとの国境。邁立開江との分水嶺をなす3,600－4,000mのダンダリカ山である。山高く谷深いゴルジュの国の一部である。

河長からいえば恩梅開江のほうが立開江より長い。その意味で、水源を一つに限定するとすれば、イラワジ川の水源は恩梅開江の主流である独龍江の源流にあることになる。ではその源頭はどこなのか。チベット自治区察隅県内の東経98° 05' 24"、北緯28° 17' 37"、ミャンマーとの国境まで8kmの地点で独龍江は日東河（東）と吉太曲（西）の二つに分かれる。吉太曲は吉太村から上流部で戛達曲と名称を変える。いずれが本流なのか、私の手元にある情報と2003年秋の踏査行の結果も踏まえて整理してみよう。

『中国国際河流』（科学出版社）では、「イラワジ川の本流である恩梅開江（独龍江）は、中国チベット自治区察隅県の伯舒拉嶺の来亜拉山（海抜5,298m）東麓に発し日東村、雲南省貢山県を経てミャンマーに入る。日東河と呼ばれている。」とし、独龍江が東西に分かれる東側の流れを主流としている。一方、『中国水系大辞典』では「（独龍江の）源流はチベット地区の吉太曲である。水源は察隅県竹瓦根郷の伯舒拉嶺の山麓である。」と記され見解が異なっている。

西欧の探検家たちの探査はどの程度行われたのだろうか。地理的踏査を目的にして入域したのは、私の知る限りフランス人のジャック・バコー（1909年）、英国人のF. M.ベイリー（1911年）、キングドン・ウォード（1930－31年）の3人だけである。この時イラワジ川の源流に接近したが位置を確認できる記述も写真もない。ベイリーの文章を引用する。

「フランスの旅行家、バコー氏が2年前に下ったのはこの谷である。彼の意見によると、自分が下ってきた流れ（中村註：現在の日東河）がイラワジ川源流の主流である。

イラワジ川の大きさやその重要性から、川の正しい水源を確かめることは大いに興味深いことである。バコー氏の見解は1911年4月15日付のGeographie誌に発表されたが、6月18日にこの地点に到達したときは未だ見ていなかった。私は自分が主流を辿っていることと信じ、そのことに疑問があろうとは夢にも思っていなかったので、バコー氏がより大きい川であると信じた北からの流れについて特別の関心は払わなかった。もしこのことの重要性を認識していたら、二つの流れの大きさに注意を払い、それぞれの水量を測定していただろう。

キングドン・ウォード大尉とクランブルック卿は南側のビルマから上ってきて、私が通った日東まで3日以内の所まで到達した。彼の著書Plant Hunter's Paradiseのなかで、キングドン・ウォードは、彼が見た二つの川の大きさを比較して二つの峠、ツォン・ラ（昌拉）とツァシャ・ラ（現在の益秀拉）の間に源を発する流れのほうがツォン・ラの東に源を発する流れより水量が大きいと結論づけている。これは私の意見でもある。（China-Tibet-Assam, A Journey 1911, Lt. Col. F. M. Bailey, Jonathan Cape, London, 1954）」

ベイリーの記述から分かるように、バコーは日東河の源頭をイラワジ川の水源とかんがえたが、ベイリーとキングドン・ウォードは吉太曲・戛達曲の源頭がイラワジ川の水源と結論づけている。ただし、1930－31年の旅では、キングドン・ウォードはビルマから入り吉太曲には達したが日東河は見ていない。二つの川の流水量を比較できない筈なので、疑問が残る。

1993年にはアメリカの冒険野郎とフランス人のカメラマン、中国人通訳が独龍江沿いに下降するために無許可で入ったが日東の人民解放軍駐屯所で拘束され追放された。このときアメリカ人はイラワジ川源流の氷河のある山に接近したと彼の本に書いているが、位置を確認できる地図・記述・写真はない。

では、一つに絞るとすればどちらをイラワジ川の正しい水源とすべきか、中国科学院の公式の調査記録を手に入れないと断定できないが、日東河と吉太曲・戛達曲の源頭は大して離れていない。いずれも5,300－5,500m前後のバショイラ嶺に源

を発している未踏の山域である。ロシアの1:200,000の地形地図によると、二つの川の幾つかの源頭は直線距離で東西18km以内にある。私の個人的見解としては、吉太曲－戛達曲の源頭の最北部、ロヒト（ブラマプトラ）・イラワジ・サルウィン分水嶺のジャンクションに最も近い山を正しい水源と判断したい。2003年秋の探査行で写真に収めることができた楽龍雪山5,525mと東に連なる5,240m峰の南面の谷がそれに該当する。

ベイリー大佐の足跡

探検家として後世に名を残したツァンポー大峡谷の踏査の二年前に、ベイリーは白人として初めて中国からインドのアッサムに横断したときの紀行が上記のChina-Tibet-Assamである。175ページの薄い本だが名著である。翻訳されていないのが惜しい。成都を発って北京・ラサ街道を行きチベット・中国「境界石」のあるブム・ラで主街道から離れ西に向

▼益秀拉(4,730m)から南の眺望

▼益秀拉からバショイラ嶺の楽龍雪山(5,526m)南面

かい塩井でメコンを渡り、深いゴルジュの国を横断して察隅からアッサムに抜ける。途中巴塘からツァワロンのメンコンまで中国内陸教会のニュージーランド人宣教師、H.エドガーが同行する。ミニヤコンカの未踏の衛星峰Mt. Edger 6,618mは彼の名前に因んで付けられた。ベイリーは珍獣ターキンを探すために、ミニヤコンカの東側の谷に康定・老楡林から入り峠を越えて南に下っている。登山史には出てこないが、ベイリーは1911年にすでにミニヤコンカに足跡を残している。

ベイリーの辿った道は文字通り横断山脈を横断する。成都－(大渡河)－康定－(雅龍江)－理塘－巴塘－(金沙江)－境界石－塩井－(メコン川)－碧土－(玉曲)－扎那－(サルウィン川)－門空－日東－(イラワジ川源流)－吉公(察隅)－シュグデン・ゴンパ－察隅－ミシミ高原－(ブラマプトラ川)－サディア(アッサム)のルートである。この間に標高4,000m以上の14の峠を越えている。宣教師をのぞいて、19世紀末から20世紀初頭の探検の時代にかけて中国からインド／ビルマへ深い浸食の国の横断を試みた探検家、或いは、この未踏の地域を探査した先駆者のクロニクルを纏めてみよう。

1882年…パンディット、キシュン・シン（A－K、インド)：横断してラサへ
1896年…ドルレアン公（フランス)：雲南から北ビルマ/インドへ横断
1901年…デービス(英国)：東南チベット（塩井）からインドへ横断を試み失敗
1905年…フォレスト(英国)：サルウィン、メコン流域で植物採集
1906年…ヤング(英国)：ドルレアン公と同じルートで北ビルマ/インドへ
1909年…バコー(フランス)：メコン、サルウイン、イラワジ源流域
1911年…ベイリー(英国)：メコン、サルウィン、イラワジ源流を横断してアッサムへ
1911年…ウォード(英国)；揚子江、メコン、サルウィンのゴルジュの国へ
1913年…ウォード(英国)：メコン、サルウィン、梅里雪山探査
1922年…ニール(フランス)：メコン、サルウィン、玉曲のゴルジュを通過してラサへ
1922年…ロック(アメリカ)：メコン、サルウィンのゴルジュの国へ
1922年…グレゴリー父子（英国)：メコン、サルウィン流域を踏査
1923年…ウォード(英国)：ダムヨン山群探査、雲南から北ビルマへ横断
1931年…ウォード(英国)：北ビルマから東南チベット・イラワジ川源流へ

当時のチベットと中国の境界線は境界石のあるブム・ラ、塩井のメコン川、サルウィン川のメンコン(門空)であった。ラサを目指した旅行者はこの辺りでラサの指示を受けたラマ僧たちによって撃退されている。デービスは塩井から西へビルマへの旅を試みたが、メコン川を眼下約1,000m下に見おろすラゴン僧院のラマ僧の攻撃をうけ、ロープ・ブリッジを渡ることができず断念した。この僧院が見張り台の役目を果たしていた。1911年頃は支配の手は中国人兵士に移っており、外国人にたいしては同じように厳しい状況にあったが、ベイリーとエドガーは上手に監視の目をくぐりメコンを渡って旅を続けるこ

とができた。

私が浸食の国を訪れたのは1996年の梅里雪山巡礼路一周と1998年のサルウィンの支流、玉曲峡谷の二回で、2003年が三度目である。深い谷と高い山嶺、温暖な気候と純朴な人々、陸の孤島にありながらチベット高原の過酷な風土とは異なった豊かさと文化を感じさせるツァワロンの吸引力には抗しがたい。イラワジ川源流を目指して、ベイリーの足跡を逆の方向からトレースしたのが今回の旅である。ベイリーは6月に横断したので天気は悪く、展望はきかず、当時の地図は極めて不備だったので、例えばサルウィン・イラワジの分水嶺など未確認の場所もあるが、直接目にしたことは実に正確に観察し記録を残している。私は馬のキャラバンの途上毎日細かくＧＰＳで位置を測定し、また地名、標高を記録しベイリーの本と対比したが大きな違いはなかった。

地　名	中　村		ベイリー	
			標高：メートル	
桑　久（村）	Sanju	3,090	（記述なし）	
明　期（村）	Minchi	3,645	Michi	3,764
益秀拉（峠）	Rishu La	4,730*	Zhasha La	4,755
徳　工（牧場）	Dokong	4,030	Dokong	4,130
昌　拉（峠）	Tsong La	4,460*	Tsong La	4,526
	（同定できず）		Lagyap	4,023
日　東（村）	Ridong	3,560	Ridong	3,658
斎馬拉（峠）	Zhama La	4,710*	Zhema La	4,755
諾　拉（峠）	No La	4,269*	No La	4,267
門　空（村）	Mengkung	2,200	Menkong	2,332
扎　那（村）	Zhanang	2,100	Trana	2,164
龍　普（村）	Rongpu	2,490	Lenbo	2,590
トンドゥ・ラ（峠）	Tondu La	3,352*	Tondu La	3,703
格　布（村）	Gebu	2,460	Ke	2,515
瓦　浦（村）	Wabo	2,730	Wa	2,896
ラドウン（村）	Radoun	2,880	Ratrong	2,957
トン・ラ（峠）	Tong La	3,270	Tong La	3,353
碧　土（村）	Pitu	3,170	Pitu	3,231
ベダ・ラ（峠）	Beda La	4,540	Beda La	4,542
沖　曲（村）	Tsong-ze	2,880	Trong-ze	2,743
ラゴン僧院（寺）	Ragong	3,480	Ragong	…
甲　達（村）	Jada	2,440	Jada	2,408
塩　井（村）	Yangjing	2,700	Yenching	…

（注記：中村の＊印は察隅県行政地図１：250,000、その他はロシアの地形図１：200,000による）

禁断の地－察隅へ

雲南経由で東南チベットに入る。シャングリラ(中甸)からパジェロで雲南チベット公路－四川チベット公路を5日間ひた走る。10月8日、暗い内に八宿を発ち、然烏で朝食をとり、カンリガルポ東部のパルン・ツァンポーとロヒト分水嶺の徳母拉4,802mを越えてロヒト川（中国名：察隅曲－桑曲）源流域を下る。1995年の秋に同じ道を通って無許可で察隅を目指したときの記憶が甦る。『ヒマラヤの東』（山と渓谷社　1996）の最終章で次のように書いた。

「徳母拉を境に東西の景観は一変する。西はチベット高原、東は渓谷の源頭がカール状の氷食地形で

ある。玉のような澄んだ急流が岩を噛み、川底をえぐり、深い峡谷へと高度を下げてゆく。両岸は氷雪の峰々の側壁にはさまれ、裾野は石楠花や低潅木が茂り、紅、黄色の秋の色ずきが美しい。やがて針葉樹が目立つようになり、チベット人（この辺りもカンバである）の集落が現れる。民家もチベット高原の土造りから木造となる。古玉の村である。人家は数十戸、コールバックとトレイシーが基地とした半世紀以上前の昔と変わっていないだろう。

此里さん（徳欽県の元県長で旅の案内人）の態度が緊張気味で、村に近づいたら車から降りて写真をとらないようにと注意をうながしてくれる。村人が外国人の姿をみて公安に通報することを恐れて、気をつけようとの配慮である。

古玉から下るにしたがい、見事な針葉樹の原生林となり、清流とのコントラストはカナダを思わせる。谷はますます深くなる。地図によれば、左岸に氷河をいただく伯舒拉嶺の六千メートル峰が指呼のうちに存在するが、望むすべもない。再び深いゴルジュの国にはいったことを実感する。」

7、8年の間に東南チベットの辺境も急速に変わりつつある。川蔵公路の整備・舗装がすすみ、然烏はカンリガルポ東部の拉古氷河が観光誘致の対象になっている。人口3,000人の古玉郷の中心には売店や四川料理の飯屋、招待所ができている。東チベットの何処でもそうだが漢族の進出を目にしないところはない。驚くことに広東省の援助がなされている。バスの定期便が察隅（吉公）と昌都、八一鎮（林芝地区）間に運行されている。

1995年のときは、軍や公安の目にとまらないよう察隅県の県庁所在地・吉公の手前で車道から離れてキャンプしたが、今回は許可をとってあるのでその心配は要らない。それでも許可は吉公の手前、横断キャラバンへの分岐点（2,610m）となる竹巴根までで、その先へは行けない。吉公から南の下察隅、上察隅へ訪れたかったがどうしても軍の許可が取れなかった。理由はインドに近く、軍の駐屯地が展開されており、一般の中国人も行けないということなので諦めた。

午後3時、分岐点で桑曲沿いの本道から離れ桑久への谷にはいる。昔の雲南・四川とチベットを結ぶ交易路の一つであるが、悪路である。途中で故障したトラックが道を塞ぐ。修理の目途がまったくたたないようなので、荷物を降ろして乗ってきた2台のジープを横山さんと一緒に返す。辺境ではよくあるハプニングである。集まってきていた村人に頼んでキャラバンの出発点となる桑久からトラックで迎えにきてもらう。午後6時、桑久（3,090m）に着く。いつもの流儀で、できるだけキャンプを避けるためにチベット族の家かラマ僧院に泊まることを心がけているが、ここでは交渉不成立、辛うじて小学校の教室に泊めてもらった。因みに、この辺の情報はまったくなかったので、来るまでは何も分からなかった。一世紀前のベイリーの紀行だけが頼りであった。

桑久は新しくつくられた村である。ベイリーの記述にはでていない。半日ほど針葉樹に蔽われた深い谷を上り開けた牧草地のあるところが昔の集落でベイリーの地図にある明期（3,635m）という村である。県政府の指導で農耕も可能な桑久に住民を定着させ、明期は放牧小屋の村落になっている。桑久は半農半牧のチベット族の村、54戸400人、明期は11戸で桑久の管理下にある。この谷には狼、豹、熊、小熊猫、狐、猿、毒蛇が生息している。チベットのイメージとは異なる察隅地方の特色である。

交易路は明期で二つに分かれる。陸の孤島への交通は、今でも馬と騾馬のキャラバンが唯一の輸送手段である。

(1) 南東へ：イラワジ・ロヒト（ブラマプトラ）分水嶺の益秀拉(4,730m)を越える。ベイリーのルートで我々が辿った道。

(2) 東へ　：ロヒト・サルウィン分水嶺の折拉(4,764m)を越え、サルウィン川のほとりの古拉を通って扎玉で玉曲を渡り、竹卡でメコン川を渡り主街道に繋がる。1882年にA－Kが、1950年にパターソンが通った道である。以後このルートは外国人が通過したというニュースはない。パターソンのことは『深い浸食の国』に書いた。

現在は桑久が交易キャラバンの起点・終点になっている。察隅の吉公から生活物資を古拉や日東に運んでいる。梅里雪山巡礼の一行もここを通って八宿方面に帰る。

小学校の教室に二晩泊めてもらい、雨のなか馬の手配と情報収集をする。小学校は古玉出身の若い可愛らしい女性の先生が１人、生徒は一年生７人、二年生８人。三年生はゼロ。四年生以上は吉公の学校へ行く。寄宿制があるようだ。先生は使命感に燃えている。彼女は八一鎮の民族学院で勉強した。手当は月に５－600元支給されている。生徒は素直で闊達である。チベット語の素読の時間には声を張り上げて唱和していた。先生と生徒のふれ合いに心が暖まる。明るい未来を感じさせてくれる。

馬方との交渉が終わる。馬11頭、馬方３名で日東まで馬・馬方とも1頭・１人１日40元で契約する。彼らにとって外国人との付き合いは初めての経験である。他の場所の半分以下の金額である。リーダーの達珠さんを夕食に呼ぶ。彼は25歳のチベット族・カンバで村の実力者のようだ。馬賃、松茸、冬虫夏草の現金収入は年3,000元ぐらいだが、大麦、米、玉蜀黍などの生活必需品は物々交換で賄うという。短気で情緒不安定な性格だが私にはよく尽してくれた。初めにフランス製の高級ナイフをあげたせいかもしれないが。

この付近も松茸はたくさん採れる。が、遠隔地なので生では運べないので塩蔵にして出荷する。７、８月が最盛期で雲南に出荷する。どこで採ってもよいが、一シーズンに松茸は25元、冬虫夏草は50元を上納金として村長に払わねばならない。

イラワジ・ロヒト分水嶺

10月10日、９時 10℃。雨のなかを11頭の馬で桑久を出発する。治りきっていないギックリ腰の痛みを心配したが、斎藤淳生さんから頂いた鎮痛薬のお陰だろうか、堪えられそうだ。この日は明期の放牧小屋に泊めてもらう。娘さんたちは美人揃いである。

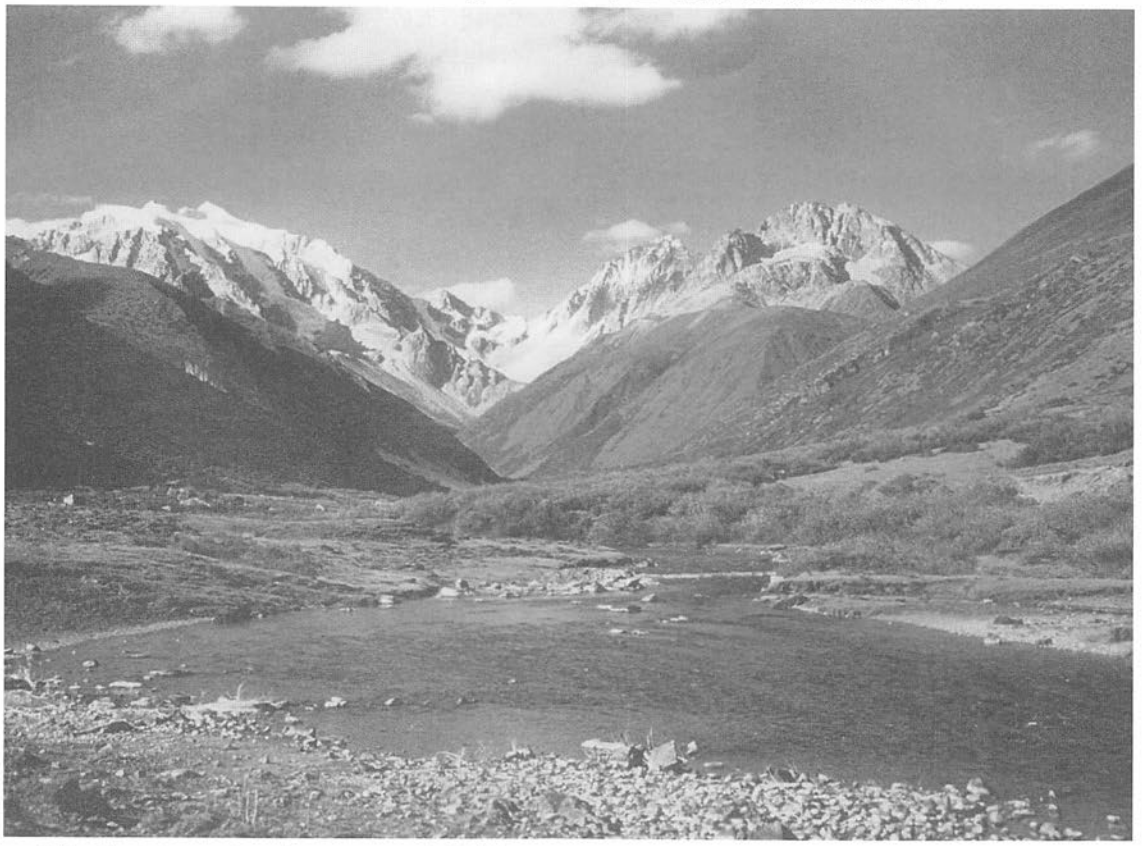
10月11日、８時半 10℃。雨が上がって青空が見えてくる。どうやら雨期が明けるようだ。「晴れ男」のジンクスは生きている。馬上で運も実力のうちと自画自賛する。キャラバンは折拉－古拉の街道から離れて東南の益秀巴の谷に入る。益秀拉でイラワジ・ロヒト分水嶺を越えてイラワジ川源流域を下り日東にいたる街道である。ベイリーとは逆の方向で辿る。益秀拉の道は下が渓谷で上部が開けた牧草地となり、石楠花の群落のあとは砂礫と岩の急斜面に道がつけられている。

渓谷部分をベイリーは険しいゴルジュ帯と表現しているが、さほど険悪な谷ではない。むしろ美しい原生林の谷である。ベイリーは４回木の橋を渡ると書いているが、その通りだった。道は昔と変わっていない。ただ、雨が続いたせいで道がぬかるみ、馬が苦労する。チョンチュンという地名の放牧地（4,170m）で、無人の仮小屋に泊まる。寒い。夜は満月が煌煌と谷間を照らす。ベイリーのスピードに比べると我々は遅い。1.5倍ぐらいかかる。人数も馬の数も多いし、しかも万事ゆっくりペースの老年探検隊である。馬に乗るのも降りるのも２人がかりで世話してもらうので時間がかかる。

10月12日、快晴となる。朝マイナス４℃まで下がる。７時半に出発し10時半に待望の益秀拉(4,730m）に立つ。「オイラソー。神様、念願のイラワジ川源頭の峠に立つことができました。」峠には雪は殆どなく、草は枯れ茶色の無機質な世界である。谷の北北西に伯舒拉嶺の6,011mの無名の山塊が見える。その北東に楊巴又松6,005mを期待したが、手前の尾根に遮られて見えない。この山はいつまでたっても姿を現わさない。南方にミャンマー国境の山を見たかったが、尾根に邪魔され僅かに峨々岩峰の連なりの一部が望見されただけだった。多分5,500m前後のピークであろう。南東は独龍江の源流部である戛達曲が望まれる。上部は比較的緩やかな谷である。峠で巡礼の一家とすれ違う。若い娘さんが馬上の老人を心配そうに労わっている。『中国国際河流』がイラワジ川の水源としている来亜拉山5,297mが何処にあるかを馬方たちに聞いたが知らないという。

ベイリーは６月20日この益秀拉を越えたが、周囲の景観については、東斜面の峠近くまで石楠花の群落が発達しているとだけ記述している。天気が悪かったのだろう。専門の蝶のことと青いケシ(Meconopsis horridula）については書いている。この峠はベイリーにとって中国からインドへの長い横断旅行の文字通り分水嶺であった。彼の文章を引用しよう。

▼イワラジ川（独龍江）源頭のバショイラ嶺の山と流れ、左は楽龍雪山（5,526m）南面

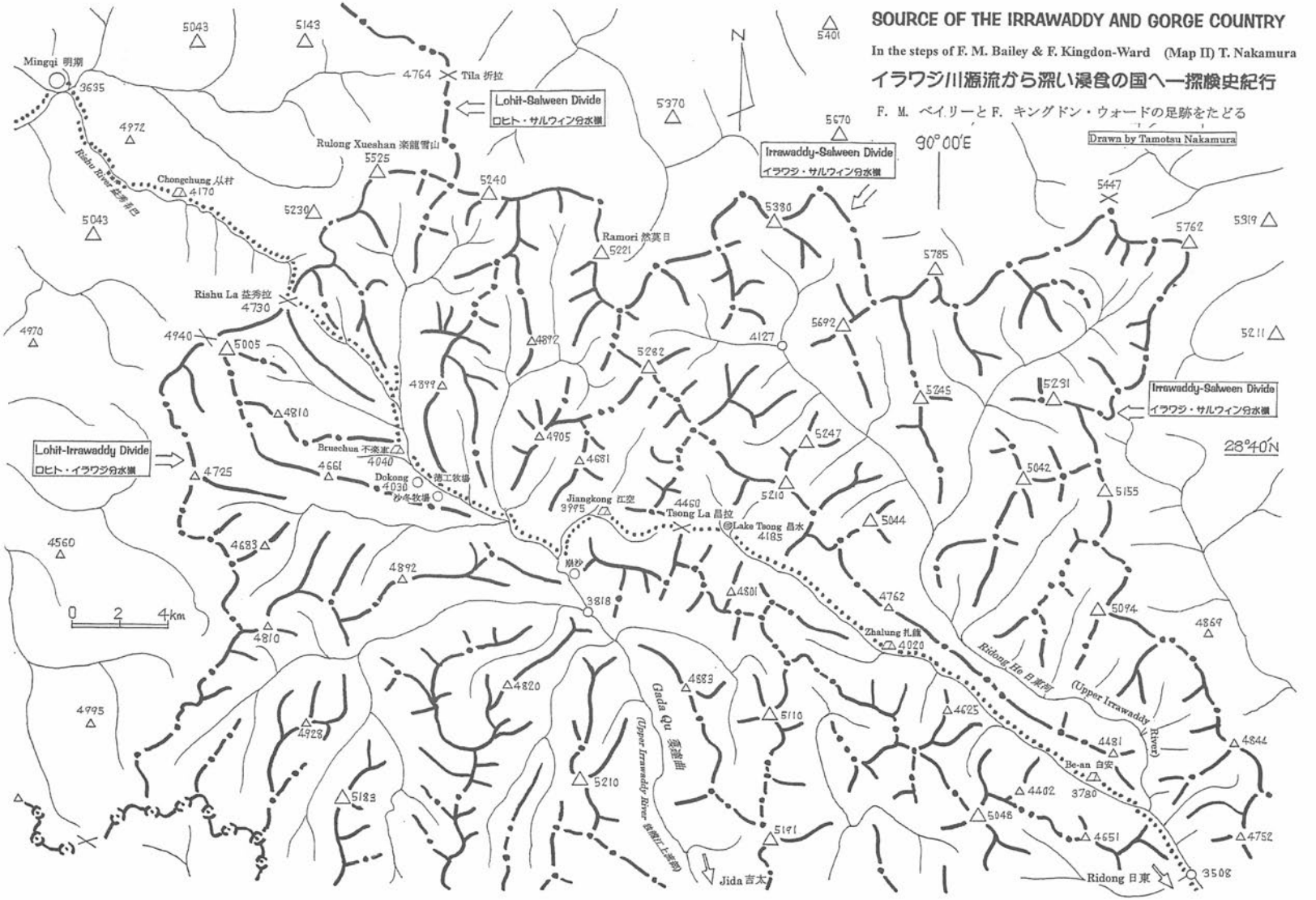


「翌日私はイラワジ・ブラマプトラ（中村註：ロヒト）分水嶺Zhasha La(4,755m)を越えた。Dokongから5.5マイルのところである。今私は、まだ遠いけれども、インドが手の届くところに近づきつつある。リマからきた１人の男に会った。リマからミシミを通ってアッサムに行く道がある、15日間かかるが荷駄は通れないと彼は私に言った。」ベイリーにとっては貴重な情報であった。

道は益秀拉からイラワジ源頭の支流を下り約８㎞で本流に至る。午後４時頃、キャラバンは先に行かせ、街道をそれて東に歩き小高い丘を越えて本流に達した。感動の一瞬である。澄んだ碧い清流が蛇行して山裾を流れる。北の正面、左に小さな氷河をいただく雪峰、右に岩峰が望める。流れは６㎞ほど上流で二俣となる。一つは真直ぐ雪峰と岩峰のコルに突き上げている。もう一つは岩峰の手前を右に廻りこんでおり、その源頭は奥にあるロシアの地図にある岩峰5,240mに囲まれているようだが見えなかった。雪峰を馬方のリーダー達珠に訊ねると「楽龍雪山」と答えが返ってきた。この山の北面には氷河がかかっており、明期から折拉に向かう街道から望めるはずである。この辺のチベット族にはよく知られた山らしい。ロシアの地形図によると楽龍雪山は5,525m、左の岩峰は5,200m前後である。少し上流まで右岸につけられたヤク道を行くが、眺望が変わらないので引き返す。河原(4,220m)に下り立ち、イラワジ川に最も愛着をもったキングドン・ウォードに造詣の深い金子民雄さんに頼まれた「イラワジ川源流の石」を拾う。

支流と本流の合流点を過ぎ６時半に不楽車という放牧地(4,040m)に着き、キャンプする。陳さんが昆明で新たに調達してきたテントは快適である。ここからもイラワジ川独龍江源頭の楽龍雪山の全容がよく見える。ベイリーも通過しているが、何の記述もない。楽龍雪山の岩峰も雲に隠れていたのだろう。

10月13日、朝マイナス４℃、快晴。乾季に入った。道は広い谷の左岸を下り、11時に徳工牧場(4,030m)を通過する。ベイリーのDokongである。


SOURCE OF THE IRRAWADDY AND GORGE COUNTRY
In the steps of F. M. Bailey & F. Kingdon-Ward (Map II) T. Nakamura
イラワジ川源流から深い浸食の国へ—探検史紀行
F. M. ベイリーとF. キングドン・ウォードの足跡をたどる
Drawn by Tamotsu Nakamura
90°00'E
28°40'N
N
Mingqi 明期
Tila 折拉
Lohit-Salween Divide
ロヒト・サルウィン分水嶺
Irrawaddy-Salween Divide
イラワジ・サルウィン分水嶺
Rulong Xueshan 楽龍雪山
Rishui River 益秀河
Chongchung 从村
Ramori 然莫日
Rishu La 益秀拉
Lohit-Irrawaddy Divide
ロヒト・イラワジ分水嶺
Bruechua 不楽車
Dokong
德工牧場
沙冬牧場
Jiangkong 江空
Tsong La 昌拉
Lake Tsong 昌水
Zhalung 扎龍
Ridong He 日東河
(Upper Irrawaddy River)
Gada Qu 夏達曲
(Upper Irrawaddy River 前期江上流段)
Be-an 白安
Jida 吉太
Ridong 日東
0 2 4km

当時は民家が2軒あったと書いているが、今はなにもない放牧地である。やがて本流は峡谷に変わる。道は山腹を水平に左岸を辿る。昼すぎに独龍江本流の戛達曲から分かれて東北に向かう谷を上る。昌拉を越え日東への街道である。江空(3,995m)という放牧地でキャンプする。ヤクを連れて上がってきた黒テントが二つある。あと10日ほどで下るという。達珠がなにやらテントのチベット族と商売をしている。どうやら自分たちの商品も運んできたようだ。夜は満天の星空、天の川が美しい。

10月14日、朝8時　1℃。朝方は曇っていたが晴れてくる。早立ちして10時に昌拉(4,460m)に着く。石楠花が峠近くまで生えている。道はなだらかで峠は広々している。馬20頭規模の隊商が行く。隊商が察隅から日東に持ってゆく商品は肥料と日用品である。門空へも肥料を運ぶ。帰りは空荷である。昌拉は独龍江上流の吉太曲・戛達曲と日東河の分水嶺である。峠の東側に昌水(4,185m)という直径150mほどの緑青色の小さな湖がある。日東河の支流に挟まれている。ベイリーに語ってもらおう。

「6月19日にTsong Laへ登って行った。道は徐々に背の高い杜松と樅の木を後にして、背の低い杜松、石楠花、柳の間を進んだ。頂上に着く1マイルほど前で直径150ヤードの美しい円形の湖を通過した。片側は石楠花が満開だった。全体の風景は庭師が考えるような公園にありがちの人工的な特徴を感じさせる。(中略) 峠から下る途中、4,110mの地点で可憐な青と黄色のケシに出会い、また深紅の蘭を見つけた。」花のシーズンには山はおおかた雲に覆われている。地理的踏査には不向きな季節である。

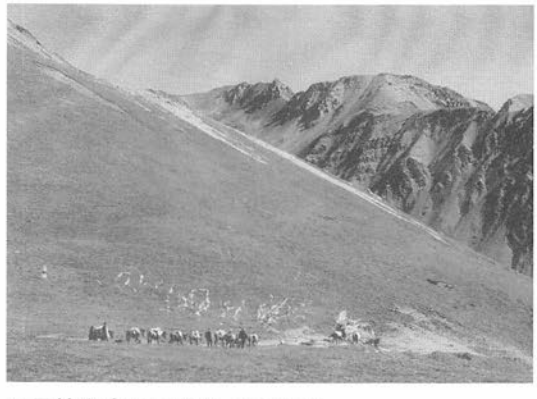
我々は牧草地と放牧小屋が点在する杜松や樅の木の美しい豊かな針葉樹林の谷を下る。「ここは花が豊富で蝶もたくさんいる美しい土地である。この谷は植物学者の宝庫であろう」とベイリーもこの辺りの風景を称えている。天気は安定している。

10月15日、低い峠を越えて日東河本流へ出る道と日東村に下る道の分岐点（3,890m）を通過して沢山のヤクがいる広い放牧地を行く。巡礼の数が多くなる。1909年にバコーはイラワジ・サルウィン分水嶺の5,300mの峠を東側から越えて日東河を下っている。バコーは自分が通過した分水嶺の源頭がイラワジ川の水源であると判断した。しかし、バコーの地図と私がロシアの地形図1：200,000から描いた地図と比較してみると分かるが、バコーが下ったのは日東河の支流であり、本流は西側にある。本流の源頭は『中国国際河流』に書かれているイラワジ川の水源であるかもしれない。聖山グンザという石灰岩の巨大な岩峰の麓にある丁昆南空村を通ったとき、無人のラマ寺を訪れる。ベイリーのGon-se僧院である。当時はラサのセラ寺で修行したラマがいた。

10月16日、やがて道は日東河との合流点を通過する。本流は水量多く清冽なブルーの透きとおった奔流が原生林のゴルジュ帯を逆巻いて下る。圧巻である。やがて段丘が大きく開けると日東は近い。この日は午前11時過ぎに上日東(3,560m)に着いてチベット族の家で旅装を解く。3分の1の行程は終わり、新たに門空までの馬の手配が必要となる。

（次号へ続く）

▲昌拉（4,460m）から南を望む、湖は昌水



▲昌拉を南に下るキャラバン

地域ニュース

《ネパール》

ＪＡＣ学生部がムスタン遠征隊を派遣

ＪＡＣ学生部では、８月から９月にかけて、ムスタン地域のダモダール・ヒマールのチービ・ヒマール(6,650m)に登山隊(和田岳史隊長ら５名)を派遣することになった。同峰は1982年春にＨＡＪが初登頂したこの山群の最高峰ハムジュンガル・ヒマール(6,759m)の南東に位置しており未踏と思われる。

広島山岳会がテンカンポチェ登山へ

広島山岳会は９月から11月にかけて、ロールワリン・ヒマールのテンカンポチェ(6,500m)に登山隊を派遣する。同峰はコンデ・リの西に位置しており、メンバーは名越實(56)、松島宏(52)の２名で北東ピラーをカプセル・スタイルで登攀する予定である。

《パキスタン》

スパンティーク(7,027m)の新ルートへ

今夏、平出和也(25)と飛田和夫(58)のペアがスパンティークのゴールデンピラー（1987年にイギリスのミック・ファウラーとソーンダースによって初登攀された）右手の尾根に新ルート開拓に挑戦することになった。

《中国》

東海大学山岳部が未踏峰へ

東海大学は、今夏、ムスターグ・アタ(7,546m)南面に位置するカラコンロン山群の主峰で無名峰の6,355m峰に登山隊を派遣することになった。小松由佳(21)隊長ら７名の学生に監督、コーチ、医師が参加する。

トピックス

第２回　山岳文化学会大会演題募集

山岳文化学会では、第２回大会を下記のとおり開催するが、会の内外から「一般口演」の演題を募集するとになった。

記

日時：11月27日（土）９時～28日（日）正午
場所：東京慈恵会医科大学（東京都港区西新橋）
参加費：３千円
募集演題内容：宗教、民俗、文学、登山史など人文部門、地形、気象、自然保護など自然部門、登山装備、技術、レスキューなど登山行動部門、国内、海外の山岳地域研究部門など、山岳、登山全般についての研究。
口演時間：15分＋討論５分、スライド10枚以内
演題募集要項の資料請求先：
〒170-0013　東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号　日本ヒマラヤ協会内、山岳文化学会第２回大会係　FAX 03-3988-8502

Books

垂　直　の　記　憶

山野井泰史氏が12年間に18回挑戦したヒマラヤの山々の登山の中から、ブロード・ピーク、メラ・ピークとアマ・ダブラム、チョー・オユー、レディース・フィンガー、マカルーとマナスル、Ｋ２、ギャチュン・カンの登攀について書き記したもの。素晴らしいの一言に尽きる。是非ご一読を！。
Ａ５判　244頁　カラー８頁　2004年４月15日刊
山と渓谷社　1,500 円＋税

■財政支援〔３万円〕岩崎洋、佐藤英樹
〔２万円〕鈴木正典、享子

東京集会のお知らせ

日時　５月31日（月）午後７時～
内容　山の文化とともに(斎藤一男著)について
場所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

野沢井歩前専務理事メモリアル　TIBET TREK

神秘の地チベットへ、幻の花「ブルーポピー」を見に行こう！

HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集

ＨＡＪがこれまで過去４回サマーキャンプを実施したニンチン・カンサＢＣへのトレッキングです。拉薩（ラサ）の街を俯瞰したり、チベット仏教の聖なる湖ヤムドクツォを眺望し、夏の高原をトレックしながら幻の花ブルーポピーや咲き乱れる小さく可憐な花々との出会いを楽しみます。

フライトスケジュールによって日程が変更される場合があります。

○料金：435,000円　○募集人員：15名限定（最少催行人員10名）　5月15日（土）14時半説明会

○ＨＡＪの岩崎洋常務理事が同行　○問い合わせ先：ＨＡＪ事務局

	月・日	都　市　名	交通機関	摘　　要
1	7月28日（水）	成田～北京～成都	CA452	空路、北京経由四川省の成都へ。〈成都／ホテル〉
2	7月29日（木）	成都～拉薩	国内線	空路、チベット自治区の中心地拉薩へ。〈拉薩／ホテル〉
3	7月30日（金）	拉薩	専用車	終日、ポタラ宮、大昭寺、八角街などの観光。〈拉薩／ホテル〉
4	7月31日（土）	拉薩	トレッキング	拉薩近郊のプンバ・リ(4200m)登山で高所順応。〈拉薩／ホテル〉
5	8月1日（日）	拉薩～ランカーズ	専用車	専用車にてランカーズへ。天候が良ければ、途中のカンパ・ラからは青く美しいヤムドク・ツォやニンチン・カンサの雄大な景色が眺められます。〈ランカーズ／招待所〉
6	8月2日（月）	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね4700m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
7	8月3日（火）	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね5000m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
8	8月4日（水）	ランカーズ～マヨン村～ニンチン・カンサＢＣ	専用車、トレッキング	専用車にてカロ・ラ(5045m)を越え、マヨン村へ。マヨン村からニンチン・カンサＢＣまでのトレッキング（約3時間）。〈ニンチン・カンサＢＣ／テント泊〉
9	8月5日（木）	ニンチン・カンサＢＣ	トレッキング	ニンチン・カンサＢＣ付近のトレッキングとブルーポピーなどの高山植物の観察〈ＢＣ／テント泊〉
10	8月6日（金）	ニンチン・カンサＢＣ～マヨン村～拉薩	トレッキング、専用車	往路を拉薩まで戻ります。〈拉薩／ホテル泊〉
11	8月7日（土）	拉薩～成都	国内線	国内線にて成都まで戻ります。〈成都／ホテル泊〉
12	8月8日（日）	成都	専用車	終日、成都市内観光とショッピング。〈成都／ホテル泊〉
13	8月9日（月）	成都～北京～成田	CA451	空路帰国の途へ。到着後解散。

高橋照（TAKAHASHI Akira ）

1914. 2 .28～1986. 2 .21　東京都千代田区生れ。巣鴨中学時代から登山を開始。中央大学に入学。前穂高岳四峰正面壁、同三峰登攀。東京刑事地方裁判所予審に勤務。その後、家業のボタン店を継ぐ。戦前は京浜山岳団体連合会などで活躍。1943年応召されて中支戦線へ従軍した。1947年、山岳巡礼クラブに入会。新しく結成した日本山岳連盟では「海外委員長」を務める。1962年（春）全日本山岳連盟第三次隊（隊長以下８名）の隊長としてレンポ・ガン(6,979m、当時はビッグ・ホワイト・ピークと呼ばれ標高は7,083m)に初登頂を目指して入山。中央山稜経由で５月３日、安久一成、森田格が初登頂に成功、５日にも５名が登頂した。この登山の模様を16㎜映画にしたが、日本テレビから放映され『民間テレビ・ドキュメンタリー部門最優秀賞』を受賞した。70年（春）三浦雄一郎がエヴェレストのサウス・コルからスキー滑降した遠征の許可を取得。71年（春）マナスル(8,163m)西稜の初登攀を目指した登山隊（隊長以下11名）を率いて入山。５月17日、田中基喜と小原和晴が初登攀に成功した。これ以降ネパール生活が続く。73年（秋）ダウラギリⅠ(8,167m)南壁偵察。75年（春）には都岳連が同南壁に派遣した登山隊（雨宮節隊長ら17名）の輸送担当として参加した。77年（秋）単身ネパール領ムスタンに潜入しロー・マンタンに入城、国王に会う。82年（春）ＨＡＪがムスタンのハムジュンガル・ヒマール(6,759m、当時はブリクティ・サイル6,364m)に派遣した登山隊（菊地薫隊長ら11名）の学術班として参加し再びムスタン入りを果たしたが、ロー・マンタンには入城出来なかった。この時の紀行は遺作としてＨＡＪの「ヒマラヤ」に2002年から３年間「ロー・マンタンの空、遥かなり」として20回連載された。晩年はカトマンズの『ランジャン・ハウス』に居住し、『照さん、隊長』の愛称で呼ばれ「ネパール浪人」と称された。食道ガンで死去。著書に『マナスル西壁』（Ｓ47年)、『秘境ムスタン潜入記』（Ｓ54年)、『ネパール曼陀羅』（Ｓ56年)、共著に『岩と氷雪への登山技術』（Ｓ14年)、『山と闘ふ』（Ｓ14年）がある。

禿博信（KAMURO Hironob）

1951.10.13～1983.10. 8　熊本県阿蘇郡生れ。竜谷大学山岳部で登山を始める。関西岳人倶楽部に入会。76年春、奥鐘山西壁広島中央ルートを上島康嗣と第三登。77年、アラスカ、ハンター(4,443m)に北稜から登頂。78年（夏）ＪＡＣ東海支部がラトックⅢ(6,949m)に派遣した登山隊（原真隊長ら６名）に参加するが南東壁の6,750mで断念。高山研究所に所属し、原真の『高所登山のルネッサンス』の実践者となる。79年（夏）ペルー・アンデスのワスカラン南峰(6,768m)に単独で4,600mから９時間で登頂。チョピカルキ(6,354m)南壁を上島康嗣とアルパイン・スタイルで初登攀、二人とも手足に凍傷を負う。80年（夏）マッキンリー(6,194m)の通常ルートの4,200mから上島と７時間で登頂、２時間で下降したが、禿は足に上島は手に凍傷を負う。81年（夏）アコンカグア(6,959m)通常ルートを６時間で登頂した後、南壁を山本正嘉と４回のビバークで１月27日アルパイン・スタイルで登頂。同年（春）ダウラギリⅠ(8,167m)北東稜に単独アルパイン・スタイルで挑戦し、４回のビバークで６月２日登頂に成功した。こうして禿は一躍日本ヒマラヤ登山界のトップ・クライマーに踊り出た。82年（夏）日山協がチョゴリ(8,611m)の北稜から無酸素・初登攀を目指して派遣した登山隊（新貝勲隊長ら49名）の支援隊リーダーとして参加、現地で登攀要員となり、８月15日、第二次隊として高見和成、川村晴一、重野太肚二と登頂に成功したが、帰路重野と8,350mでビバークし凍傷を負う。83年（秋）日本人として初めて南東稜から無酸素でエヴェレスト登頂を狙ったイエティ同人隊（吉野寛隊長ら５名）に参加、10月８日、山学同志会隊の鈴木昇己、川村晴一、イエティ隊の遠藤晴行に次いで登頂に成功した。しかし、最後に登頂した吉野寛と下山中、ヒラリー・ステップ付近から転落・行方不明となった。吉野も翌日転落した。追悼号に『アナヴァンNo５　禿博信追悼号』（Ｓ59年）がある。

佐久間隆（SAKUMA Takashi）

1950.8.20～1982.12.18　北海道芦別市生れ。高校時代は柔道部に所属。上京して1971年2月、東京白稜会に19期生として入会。南北アルプス、谷川岳、八ヶ岳などで四季の登攀を実践。76年（夏）アラスカ、デイッキー(2,909m)など三座に登頂。81年（春）ＨＡＪが縦走を目的にカンチェンジュンガ(8,586m)に派遣した登山隊（山森欣一隊長ら22名）に参加。4月26日、無酸素でヤルン・カン(8,505m)の8,000m地点に到達したが登頂はならなかった。同年（冬）ＨＡＪが派遣し、インド、ナンダ・カートで7名が行方不明となった登山隊の捜索隊（菊地薫隊長ら14名）に参加し、冬のヒマラヤの標高6,000m付近の捜索を行う。82年（春）ＨＡＪがネパール、ムスタンの未知の山群、ブリクティ・サイルの解明のためハムジュンガル・ヒマール(6,759m)に派遣した登山隊（菊地薫隊長ら11名）の登攀隊長として参加。5月18日、土谷正伸、タシとⅣ峰(6,426m)とⅤ峰(6,476m)に初登頂、25日土谷とⅢ峰(6,655m)に初登頂し、続いて最高峰のハムジュガル・ヒマールの初登頂にも成功した。同年（冬）冬期初登頂を目指してＨＡＪがマナスル(8,163m)に派遣した登山隊（山田昇隊長ら10名）に参加。12月18日、角田不二、青田浩と頂上アタックを行い、頂上プラトーの標高7,650m付近に到達したが、強風のため登頂を断念し下降中、エプロンから滑落し7,200m付近で遺体となって発見されクレバスに埋葬された。遺稿追悼集に『烈風の彼方へ』(1983年）がある。

〔訂正〕 トータル獲得標高2003

前号の標題の表の中で、57番目の小口順史を38番とし、標高を43,634mとし6座と訂正する。生年月日を1968.8.29とする。以下を追加する。

ｆ．イスモイル・ソモニ　7,495　Ｔ　2003.8.12　ボロド

なお、坂原忠清以下の順位を一つづつ繰下げる。

■ 寸　感 ■

山岳界永年の懸案であった『登山隊調査用紙』の統一が、山岳5団体の合意によって実現した。登山を取り巻く環境は激変しているが、ヒマラヤ登山の世界にその傾向は著しい。いまやヒマラヤの山岳は限られた登山家の試練の場だけではなく、健康や楽しみのための人々が集う場ともなった。登山であっても遠足であっても、山岳に挑戦した行為を記録し残しておくことは、20世紀に花開いた一つの文化として必要なことである。それによって、後世の人々が20世紀に光を当てた時、文学や音楽、スポーツなどと共に、「ヒマラヤ登山」という文化があったことを知り得るのである。

危険があることを承知して行われる登山も、安全だと信じて行われる遠足も、共にその行為の中での『死』を肯定している訳ではない。そのためにも、次の課題は『海外登山情報センター』の開設であろう。登山界の英知を結集して、変動する登山界に適切に対応したいものである。　（山森）

事務局日誌（4月）

1日（木）　衛星電話の件、大住評議員へ連絡

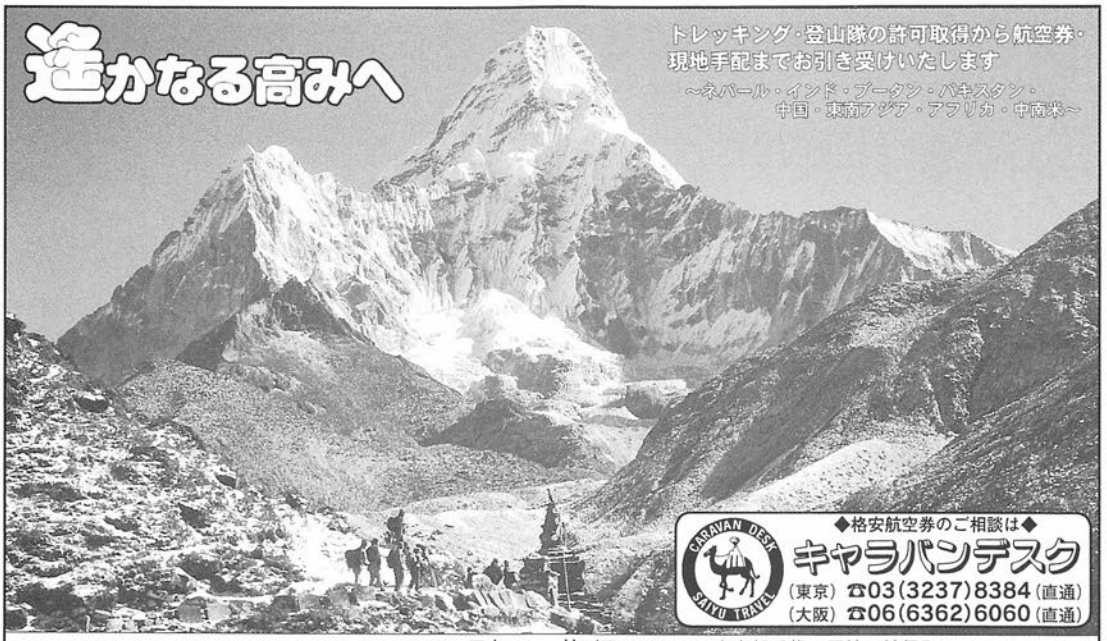
7日（水）　ヒマラヤ390号発送
「高峰登山調査用紙」記者発表の件
実務担当者へ報告

22日（木）　「山の文化とともに・斎藤一男」出版記念会　於：東京ホテル銀座ラフィナート（酒井、山森、八木原）

26日（月）　東京集会（12名）

ヒマラヤ No.391（6月号）

平成16年5月10日印刷　16年6月1日発行
発行人　山森欣一
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋4－2－7
萬栄ビル501号
電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア

株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ（http://www.saiyu.co.jp）

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５F
☎03(3237)1391(代)　FAX 03(3237)1396

■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町６－４　北川ビル５F
☎06(6367)1391(代)　FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル（通話料無料）をご利用下さい。
0120－811395

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局
中日新聞東京本社

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル6F
［TEL］03-3595-4830（代）［FAX］03-3595-4831
http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/
※定価額に消費税も含まれています。

最新クライミング技術
菊地 敏之 著
フリークライミングからマルチピッチ、アルパイン、ビッグウォールまですべてのロッククライマーへの実践的な最新技術書。一つひとつの技術を、単なるマニュアルとしてではなく、その意味や選択基準までを含め解説。
1,680円

ベーシック・フリークライミング
菊地 敏之 著
新しい生涯スポーツとしてあらゆる世代に爆発的な人気のフリークライミングを、ムーブの作り方、ロープワーク、自然壁の登り方、スキルアップのしかたや取り組み方など必要不可欠な多項目にわたって、ビジュアルにわかりやすく、かつ理論的に解説。ジムからはじめてアウトドアを目指す、すべてのクライマーのための教則本の決定版。
1,785円

山小屋の主人の炉端話
工藤 隆雄 著
著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取っておきのお話。
1,575円

チャレンジ！アルパインクライミング【北アルプス編】
廣川 健太郎 著
北アルプス全域を代表する7ルートを、分かりやすくカラー写真で解説したルート案内書。夏の岩壁・雪稜のバリエーションルートに加え、これまでほとんど紹介されていない冬期岩壁登攀、ルンゼ登攀を紹介。
2,625円

チャレンジ！アルパインクライミング【南アルプス・八ヶ岳・谷川岳編】
廣川 健太郎 著
上巻の北アルプス編に続いて、南アルプス、八ヶ岳、谷川岳などから、日本を代表するアルパインクライミングルート123本を、写真を豊富に使ってわかりやすく解説したルートガイドの決定版。
2,625円

すぐ役立つ 山のメモ帖
岳人編集部 編
登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を提供。
1,470円

中高年の雪山入門
福島 正明 著
低山から夢のヒマラヤまで…。トラブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しもう。
1,680円

すぐ役立つ 新・山の雑学ノート・第1集
岳人編集部 編
山での話題が登った山の数だけではつまらない。豊かな雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。
1,470円

女性ガイドのしなやか登山術
樋口 英子 著
常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける、女性登山ガイドのユニークな登山講座。
1,575円

登山の運動生理学百科
山本 正嘉 著
「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。
2,100円

山書散策
河村 正之 著
今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいか。そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。
1,575円

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿１-16-７ ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町１-６-１(タキイビル２Ｆ) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町３-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町３-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町１-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町５-３ ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-４ ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-１ ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手３-４-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通２-５-１ ☎025-243-6330
●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南１-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡４-１-８ ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通１-４-５ ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通１-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西４-８ ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西３-５ ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条４-１-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条１-43-９ ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3200-7219

ICI石井スポーツ

事　務　所／〒169-0073 東京都新宿区百人町１-４-15 ☎03-3200-1004